



世代の新しい〈父〉の交代劇が物語化されており、さらに新しい〈父〉は男性ジェンダー化された商売の世界を通じて男同士の絆を強める。「家族会議」での結婚関係はそうした男同士の絆を肯定する経済システムの導入によって「自然」化されているのである。

第5章は通俗小説における植民地主義の問題を論じている。1930年代後半から女性のライフ・コースをテーマとする通俗小説に〈外地〉が多く登場し始める。〈外地〉へ向かう女性たちを描くことで通俗小説は植民地主義と家父長制の双方が併存するイデオロギー装置として機能したことを確認した。

第2部では1部で副次的に使用した挿絵を中心にして、挿絵という表現方法がどのように展開されたのかについて論じた。1部で分析した通俗小説の女性イメージは挿絵によって可能になったわけだが、そうした表現が可能になった過程を総合的に論じたのが第6章である。複製技術時代における挿絵という表現の位置づけを行った。そのうえで、写真に比して自由な構図を採りうるために挿絵の展開がみられ、印刷技術にあわせた形で女性イメージの描法や構図の意識が確立され、挿絵は新聞通俗小説を読者に強く印象づけることを可能にした。

第7章では個別論的に挿絵の第一人者である石井鶴三の挿絵に注目している。出版メディアの発展による大多数の読者に眺められる挿絵は美術の大衆化といった問題と交差しながらも異なった展開を見せ、読者のための挿絵という可能性が追求されることになる。だが、挿絵と向き合った鶴三の芸術家の真摯さは時代の制約のなかで限界を抱えることにもなった。

第8章は石井鶴三を中心に語られがちな挿絵史を再考する試みがなされている。石井鶴三の登場を一つのメルクマールとして形成される挿絵の歴史は一方でそれ以前の挿絵の水脈を見えにくくしてしまう。本章では石井鶴三を定位した木村荘八の言説を再考し、1910年代における挿絵の展開について検証、そこで女性を描き出す挿絵を主流とする新聞メディアの販売戦略があったことを確認した。

第9章は1920年代から30年代にかけて活躍した小出権重の挿絵について検討した。小出は谷崎潤一郎の「蓼喰ふ虫」の挿絵で知られ、従来は谷崎潤一郎研究を中心に研究の蓄積がされてきた。しかし、本章では谷崎だけでなく小出が挿絵を描いた多数の文学テクストを横断的に検討し、「蓼喰ふ虫」の挿絵に至るまでの過程を考察することで、挿絵を論じることの意味をも考えた。

以上、通俗小説について女性イメージを中心にイデオロギー装置の側面と、そうした機能を可能にしたものの一つとして挿絵を取り上げ、その総合的な研究を目指すことを本論文の目的とした。